輪廻

柳 幹康

皆さんこんにちは、柳幹康と申します。この度貴重なご縁をいただき、一昨年に続き「続 白隠の言葉を読む」との題で連載させていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

一昨年の連載では日本臨済禅中興の祖と尊称される白隠慧鶴（一六八六―一七六九）について、彼が構築した実践体系を軸にその言葉をご紹介いたしました。その実践体系とは、まずは自ら悟ったうえで、己が境界を不断に高めるとともに、人々を広く救済するというものでした。それに対し今回の連載では、その際に取り上げられなかった白隠の言葉を十二回に分けてご紹介したいと考えております。予備知識の要らない独立したお話として毎回ご紹介する予定ですが、もしお手元にございましたら、前回の連載も併せてご覧いただければと思います。また部分的に重なる部分もございますが、毎回の趣旨は違ったものとなっておりますので、ご了承いただければ幸いに存じます。なおこのよう

な場で禅師などの敬称をつけず「白隠」という道号のみでお呼びするのは恐縮の限りですが、本連載では文献学の手法を踏まえた中立的描写に努めたいと愚考しておりますため、どうかご寛恕いただけますようお願い申し上げる次第です。

さて第一回となる今回は、仏教の前提となる「輪廻」について、白隠の言葉を紹介いたします。「輪廻」は命ある者が生死を繰り返すというインド古来の生死観で、後にインドで成立した仏教もその考え方を継承し、生前の行為により次の生の良し悪しが決するのだと説きます。

しかしながら今日でもそうであるように、当時の人々も皆がみな輪廻を前提に生きていたわけではありませんでした。そもそも人はややもすれば、自分の命に限りがあることを忘れてしまいがちです。白隠は言います、「哀れなことだ。世間の人の暮らしぶりをよくよく見てみれば、百年も千年も生きられるつもりで心うかうかと月日を送っている」（『御洒落御前物語』）。また生まれ変わりを認めない者も一定数おり、そのような人々を白隠は次のように厳しく批判しています。「「……人は死ねば灯の火が消えるよう（に何も残りはしない）、一体どんな天堂や地獄（など来世の世界）があるというのだ」——これは「断見外道」（死ねば終りと断ずる仏教外）の見方であり、恐るべき邪見である。これより愚かなことはない」（『辺鄙以知吾』巻下）。

かかる人々に輪廻を信じさせるため白隠は、主に二つの試みをしています。第一が「証言」——絶息後に息を吹き返した者や前世の記憶を持つという者が口にした死後の世界に関する話——集めること。第二が輪廻を前提とする仏教の有効性を根拠にすることで、輪廻の正しさを論証しようとすることです（『勧発菩提心偈附たり御垣守』、『辺鄙以知吾』巻下等）。

これらはあくまで輪廻を前提とする仏教の内側から為された試みであり、その外側にいる人々を必ずしも納得させるものではなかったでしょうが、白隠が輪廻を強調した理由について

は注意する必要があります。白隠は次のように述べています。

六趣（という輪廻の世界）のなかで、とりわけ人間が貴いのは、来生があることを知り、地獄があることを恐れ、菩提を求めることができるからである。

（『さし藻草』巻一）

ただ人間のみが輪廻の道理を知り己の行為を反省することで、仏道修行に向かい菩提を得ることができる――このような仏教的な信念のもと白隠は人々に輪廻の道理を説き、苦しみから脱する菩提へと正しい歩みを進めるよう促していたのでした。

なお白隠の法嗣の東嶺円慈（一七二一―一七九二）はあくまで生まれ変わりが信じられない者に向けて、その著『快馬鞭』において次のような説明をしています――輪廻は生を隔てたものだけでなく、一日の中の気持ちの浮き沈みのことでもある。正邪の分別がある時は人間、怒り狂う時は修羅、貪り欲する時は餓鬼、心ふさがる時は畜生、煩悩に執われ他者を害する時は地獄、有頂天の時は天である。したがって人は一日の間に（人間・修羅・餓鬼・畜生・地獄・天という）六種の世界を無数に輪廻しているのである――。これもまた心に振り回され苦しむ人々を菩提に導こうとする白隠同様の指導と言えるでしょう。

次回以降、人々を菩提へ向わせようと白隠が説いた様々な教えを皆さんと一緒に読んで参ります。

柳 幹康（やなぎ みきやす）
一九八一年栃木県生まれ。二〇一三年東京大学大学院博士課程修了、博士（文学）。著書に『永明延寿と『宗鏡録』の研究――一心による中国仏教の再編』（法藏館）、共著に『三国伝来 仏の教えを味わう――インド・中国・日本の仏教と「食」』（花園大学文学部監修、臨川書店）など。

お願い

花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、
各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。
＊〆切りは毎月1日です。

『花園』へのご意見・ご感想など

本誌へのご意見・ご感想など、「編集室花園係」までお送りください。
お待ちしております。

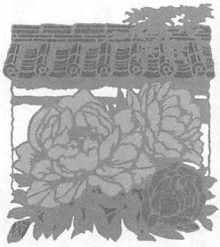
送り先
〒616-8035 京都市右京区花園妙心寺町64
妙心寺派宗務本所内編集室
俳壇／歌壇／花園　係

＊住所、氏名を必ずお書きください。
＊俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)
＊なお投稿はお返しいたしません。

花園 hanazono
「いつもココロに花園を」
あなたとわたしのポケットエッセイ集

【花　園】第71巻 第4号(通巻第836号)
令和3年4月1日発行(毎月1日発行)
定価55円
【発行人】栗原正雄
【編集人】石田信行
【印刷人】喜田眞司
【発行所】京都市右京区花園妙心寺町64
妙心寺派宗務本所 教化センター
振替／01060-9-1400
電話／075-463-3121

表紙の絵　「春牡丹」



冬の寒さを耐え、
花開く大輪の百花の王。
絵・正親 里紗(おおぎ りさ)

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,560円(税・送料込)です。
下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】
http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002

＊乱丁、落丁本はおとりかえいたします。